

白楽天と音楽（其一）

——白楽天の音楽好き——

丹羽博之

『白氏文集』を読むたびに、白楽天は実に五感の良く発達した詩人であったと思う。堤留吉氏は『白楽天研究』（春秋社）の中で「音楽的要素」の項を設け、白楽天の詩と音楽の関係を考察されている。また、彼の文学と音楽とが渾然と一体をなしていることについては、太田次男氏が『諷諭詩人 白楽天』（集英社）において触れられている。アーサー・ウェリー氏も『白楽天』（花房英樹氏訳・みすず書房）において繰り返し、白楽天と音楽の関わりを述べられている。本稿では、これら先学の驥尾に附して、彼の残した作品の中で特に音楽に関する作品を取り上げて考察を加えたい。

一

先ず、白楽天自ら音楽好きであることを作品中で述べた例を挙げる。

詩酒琴人例多薄命、予酷好三事。雅當此科、而所得已多。爲幸斯甚、偶成狂詠、聊寫愧懷。詩酒琴の人は例として多くは薄命、予

酷^{はなは}だ三事を好む。雅^{まさ}に此の科に当たれり、而るに得る所已に多し。幸爲ること斯に甚し、偶^{たま}ま狂詠を成し、聊か愧懷を写す。

愛琴愛酒愛詩客 琴を愛し酒を愛し詩客を愛し

多賤多貧多苦辛 賤多く貧多く苦辛多し

白楽天と音楽（其一）——白楽天の音楽好き——

中散歩兵終不貴 中散歩兵 終に貴ならず

孟郊張籍過於貧 孟郊張籍 貧に過ぐ

一之已歎關於命 之を一にするも已に命に關するを歎き

三者何堪併在身 三者何ぞ併せて身に在るに堪へん

只合飄零隨草木 只だ合まに飄零して草木に隨ふべし

誰教凌勵出風塵 誰か凌勵して風塵を出でしむる

榮名厚祿二千石 榮名厚祿 二千石せき

樂飲閑遊三十春 樂飲閑遊 三十春

可得無厭時咄咄 厭ふ無きを得べきも時に咄咄とつとつとして

猶言薄命不如人 猶ほ言ふ薄命 人にしかずと

〔65—3162、太和八（八三四）年、六三歳、洛陽 『白氏文集』は那波本によつた。以下同じ。作品番号、制作年、場所は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』による。〕

詩題で先ず、詩と酒と琴（音楽）を酷愛することを自ら認めている。これらを好む人は貧乏に苦しむ例が多いが、自分は幸に三十年間、樂飲閑遊できたことを喜んでいる。最後にそれにもかかわらず、時には不満も頭を擡げると冷めた目で自己を見つめている。詩の中でこれほどまでに音楽の愛好を明言した詩人は白楽天以前にいたであらうか。

白楽天はそれまでの中国の詩人の中では出世頭と言つても良い。六十歳のころには相当の地位と名声と富を得ていた。生まれついでの名門の出というのではなく、刻苦勉勵の結果、科挙及第後の出世に伴つて得たものであった。複雑な官界を巧に生き抜き、寒門出身でよくここまで立身できたという感慨もあつたであらう。

好聽琴 琴を聴くを好む

本性好絲桐 本性 糸桐を好み

塵機聞即空 塵機聞けば 即ち空し

一聲來耳裏 一声 耳裏に來れば

萬事離心中 万事 心中を離る

清暢堪銷疾 清暢せいちやうにして 疾を銷けすに堪へ

恬和好養蒙 恬和てんわにして 蒙を養ふに好し

尤宜聽三樂 尤も宜しく 三樂を聴き

安慰白頭翁 白頭翁を安慰すべし

[53 | 2369、長慶四(八二四)年、五三歳、洛陽]

詩の首聯から音楽好きであることを述べ、頷聯では音楽を聴くと忘我の境地に入るとまで言い切る。さらに頸聯では音楽を聴けば病気を治すことも可能と言う。まるで今の音楽療法の先取りと言えよう。それだけに彼の実感がこもっている。「恬和好養蒙」も知能開発には音楽教育が良く、胎教にはモーツァルトを聴かせるといふのと一脈通じるものを感じる。彼の人生、生活は音楽と深く関わっていることを具さに表現する。この詩の次には「愛詠詩」があり、詩を詠じることを愛したと事細かに詠む。

對琴酒

西窓明且暖 西窓 明且つ暖

晚坐卷書帷 晚に坐して 書帷しよゐを巻く

琴匣拂滿後 琴匣きんかふ 払ひ開く後

酒瓶添滿時 酒瓶 添へ滿つる時

角樽白螺蓋 角樽かくら白螺はくらの蓋さん

玉軫黃金徽 玉軫ぎよくしん黃金きの徽

未及彈與酌 未だ彈ずると酌むとに及ばず

相對已依依 相ひ対して 已に依依たり

泠泠秋泉韻 泠泠たる 秋泉の韻

貯在龍鳳池 貯へて 龍鳳の池に在り

油油春雲心 油油たる 春雲の心

一杯可致之 一杯 之を致す可し

自古有琴酒 古へ自り 琴酒有り

得此味者稀 此の味を得る者稀なり

祇應康與籍 祇だ^た応に 康と籍と

及我三心知 我と三心知るべし

〔63—3010、太和九（八三五）年、六四歳、洛陽〕

琴と酒の両方がわかる者は嵇康と元籍と我のみと言い切る。有名な「北窓三友 62—2985」でも詩琴酒を愛好することを自認している。詩と酒と琴、この三友は白の終生の伴であった。この三友によって彼の文学、人生は実に豊かに奥深く幅の広いものになった。彼が閑適をこよなく愛したのも三友や芸術世界に心身ともに没入したいという純粹な欲求もあつてのことであろう。それ故に、彼の文学の一つの重要な柱として閑適詩が設けられた。彼の豊かな感受性は『白氏文集』の中に満ちあふれているが、音楽の愛好によって更に彼の感性は研ぎ澄まされていったようだ。

ところが、『白氏文集』を愛読した日本の菅原道真は『菅家文章』の中で、

不解彈琴兼飲酒 琴を弾くことと酒を飲むことを解せず

唯堪讚佛且吟詩 唯だ仏を讚し且^また詩を吟ずることに堪えたり

と音楽に関しては不作法であると自ら認めている。

〔「秋」卷三・一九六 日本古典文学大系本〕

停習彈琴 琴を弾くことを習ふことを停む

偏信琴書學者資 偏へに信ず 琴書は學者の資と

三餘窓下七條絲 三余の窓下 七条の糸

専心不利徒尋譜 心を専らにすれども利あらず 徒らに譜を尋ね

用手多迷數問師 手を用ふれども迷ふこと多く 數ば師に問ふ

斷峽都無秋水韻 斷峽 都て秋水の韻無く

寒鳥未有夜啼悲 寒鳥 未だ夜啼の悲しき有らず

知音皆道空消日 知音皆道ふ 空しく日を消すと

豈若家風便詠詩 豈に家風の詩を詠ずるに便りあるにしかめや

〔卷一・三八〕

琴は學者の資となると信じて習い始めたが、いくら練習しても一向に上達せず、途中で投げ出している。「秋」の詩では酒と琴は解せずとも述べており、白樂天の最も愛した三友の内の二つまでは解らないという。こうしたところに白と道真の人生、文学の決定的な違いがあると思ふ。

與牛家妓樂雨夜合宴 牛家の妓樂と雨夜合宴す

玉管清絃聲旖旎 玉管清絃 声旖旎

翠釵紅袖坐參差 翠釵紅袖 坐參差

兩家合奏洞房夜 兩家合奏す 洞房の夜

八月連陰秋雨時 八月連陰 秋雨の時

歌臉有情凝睇久 歌臉情有り 睇を凝らすこと久しく

舞腰無力轉裙遲 舞腰力無く 裙を転すること遅し

白樂天と音楽（其一）——白樂天の音楽好き——

人間歡樂無過此 人間の歡樂 此に過ぐるは無し

上界西方即不知 上界西方は 即ち知らず

[67—3378、開成三(八三八)年、六七歳、洛陽]

美しい妓女の舞と妙なる調べ、これに勝る歡樂は無いと謳う。

音楽を伴った妓の歌舞も白楽天の好んだものであった。歌舞音曲は誰しも好むものであろうが、それを詩に堂々と詠むところに白詩の特徴があると思う。一方、好きな妓女達を自邸で養える経済力が高級官僚に出世した白楽天にはあった。官吏としてもそれなりに有能に働き、樂しむときには大いに楽しんでゐる。しかも牛李の党争などの複雑な政界を巧みに生き、地方官吏の次男坊として生まれ、若い頃は病氣と貧に苦しめられたようだが、最後は刑部尚書(法務大臣)にまでのぼりつめて致仕している。彼自らも晩年誇らかに謳ったように、正に人生の達人と呼べるであらう。

詩酒は当然様々な角度から考察が加えられて来たが、音楽については今までに余り論じられなかったと思う。「草堂記(1472)」「池上篇序(2928)」「醉吟先生伝(2953)」「不能忘情(3610)」など彼の身边を詠じた作品に琴は必ず登場する。この他、「只将琴作伴、唯以酒為家(0931)」「伴老琴長在、迎春酒不空(3239)」「臥将琴作枕、行以鍾隨身(3587)」等、白の身边には琴や音楽が常にあった。中純子氏は、琴を日課として練習したのは晩年洛陽分司時期であろうと推測されている(『中国の『樂』と文人社会』天理大学学報一七五輯、一九九四年二月)。一方、堤氏は「琴においてはよほどの達者であつたらしい」(前掲書)とされる。常に琴を携えていたことや多くの音楽に関する作品や音楽的な家庭環境(後述)から考えて、若いころから自ら樂しめるぐらいの腕前は持っていたと思う。

少壮気鋭の官僚だつたころに心血を注いで作つた「新樂府五十首」にも「七德舞」「法曲」「立部伎」「華原聲」「胡旋女」「五絃彈」等音楽や歌舞に関するものが多い。しかも前半に集中して詠まれている。「法曲」に見られる中国音楽の正統性に必要以上にこだわつたりするものも音楽への関心の高さを示すものと言えよう。

この他、音楽を聴いた感想を多くの詩に詠んでいる。数例を挙げると

「夜聞歌者」(0498)

「聽李士良琵琶」(1002)

「春聽琵琶兼簡長孫司戸」(1084)

「聽琵琶妓彈略略」(2505)

「聽歌」(3391)

「聽歌六絕句」(3501)

このような詩題は六朝詩に先例が見られるが、当然ながら音楽に強い関心が有つてのことであろう。読後感ならぬ聴後感をテーマに詩ができるところに白詩の一つの特徴がある。こうした日常の何げない心の動きが詩になることが中唐から晩唐、更には宋詩への流れと言えよう。

有名な「與元九書28—1486」「元和十(八一五)年、四四歲、江州」では、

乃至書畫碁博可以接羣居之歡者一無通曉 乃ち書画碁博に至りては以て羣居の歛に接す可き者の一も通曉すること無し。と謙遜するが音曲に関しては一無通曉と述べておらず、裏返せば少しは通曉しているとの自負があつたのではないか。

この他「霓裳羽衣歌、和微之(51—2202)」は長編であるが、微に入り細に入り霓裳羽衣を描写している。霓裳は『白氏文集』に三十余例も繰り返し詠まれているが、これも音楽を愛した玄宗への思慕と白樂天の音楽好きによるものであろう。白樂天と「霓裳羽衣曲」については稿を改めて考えたい。

『礼記』に基づく「貫珠」(美しい音色)の語が他の詩人には余り用いられないのに対して白詩に多用され、それが平安漢詩にも受け入れられたことを曾て考察した(「貫珠の音」神戸大学国文学研究ノート二十四号、一九九〇年四月)。今にして思えば、白の音楽への関心、興味の高さが音楽に関する詩を多く詠み、美しい音色を意味する「貫珠」を多用したと考えられる。

以上見てきたように、『白氏文集』には白楽天自らが音楽好きであったことを再三述べている。特に中年以降生活が安定してからの作に多い。アーサー・ウェリー氏も「彼の音楽愛が彼の作品にしみわたり始めたのは、この杭州の時期であった」（前掲書）と述べられる。以下、彼の作品を歌唱の面から考察する。

自分で歌唱

今でも音楽は好きだがカラオケはどうも……という人は多いが、カラオケは好きだが音楽はたしなまないという人はまずいない。白も音楽の造詣も深く、自らもよく唱った。

自皇子陂歸昭國里、送吟遞唱、不絶聲者二十里餘、樊、李在傍、無所措口。

皇子陂はよ自より昭國里に歸るに、送吟遞唱てつぎんでいしやう、声を絶えざる者二十里余、樊、李傍に在るも、口を措おく所無し。

〔與元九書28—1486〕、元和十（八一五）年、四四歳、江州〕

元白は文才もさることながら、音律や歌唱にも人並み優れていたこともあって交わりを深めていったのではないだろうか。

この他『白氏文集』には自ら唱ったことを多くの詩で詠んでいる。

八關淨戒齋銷日 八関の淨戒 齋して日を銷けし

一曲狂歌醉送春 一曲の狂歌 酔ひて春を送る

〔「扨表迴閑遊64—3126」、太和八（八三四）年、六三歳、洛陽〕

歌吟終日如狂叟 歌吟終日 狂叟の如く

衰疾多時似瘦仙 衰疾多時 瘦仙に似たり

「白髮67—3397」、開成四（八三九）年、六八歳、洛陽」

等自ら歌ったことを詠む詩も多く、それらの詩の多くは「醉歌」であり、酒とともに詠まれた。今でも見られることではあるが、飲めば自然と詩や歌が口をついて出る詩人であった。時には即興の自作の詩が口をついて出たこともあっただろう。歌と詩と酒は常にセットで彼の身の回りにあった。それは終生変わることは無く、「醉吟先生伝」ができた理由もそこにあった。今までは醉に重点があるように感じていたが白の意識としては醉も吟も同じ重みを持っていたのであろう。

他人が歌唱

彼の音楽好きは生来のものであろうが、彼の詩が多くの人に歌唱されたことも音楽好きに拍車をかけたように考えられる。「與元九書」（1486）で己の詩が多く階層の人々によって唱われ、人口に膾炙していたことを次のように記している。

其餘詩句、亦往往在人口中。

其の余りの詩句、亦た往往として人口中に在り。

士庶僧徒孀婦處女之口、每每有詠僕詩者。

士庶僧徒孀婦處女の口、每每僕の詩を詠ずる者有り。

妓大誇曰、我誦得白學士長恨歌。豈同他妓哉、由是增價。

妓大いに誇りて曰く、我白學士の長恨歌を誦し得たり。豈に他の妓と同じからんや、是に由りて価を増す。

様々の人々に愛誦されたのは詩句の美しさは勿論のこと、堤氏も述べられたように音律に合った歌いやすい詩句でもあったからであろう。この他、彼の詩が妓に唱われた興味深いエピソードを次のように残している。

微之到通州日、授館未安。見塵壁間、有數行字。讀之即僕舊詩。其落句云綠水紅蓮一朵開、千花百草無顔色。不知題者何人也。微之吟歎不足。因綴一章、兼録僕詩本同寄。省其詩、乃是十五年前、初及第時、贈長安妓人阿軟絶句。緬思往時。杳若夢中。懷舊感今因酬長句。

微之通州に到りし日、館を授けられて未だ安んぜず。塵壁の間を見るに、数行の字有り。之を読むに即ち僕の旧詩なり。其の落句に云ふ、緑水に紅蓮一朵開けば、千花百草も顔色無し。知らず題せる者の何人なるかを。微之吟歎すれども足らず。因て一章を綴り、兼ねて僕の詩本に録し同じく寄す。其の詩を省るに、乃ち是れ十五年前、初めて及第の時、長安の妓人阿軟に贈りし絶句なり。細かに往時を思ふに、杳として夢中の若し。旧を懐ひ今に感じ、因りて長句を酬ゆ。

[15—0853、元和十（八一五）年、長安、四四歳]

偶助笑歌嘲阿軟 偶たまま笑歌を助けて 阿軟を嘲る

可知傳誦到通州 知るべし伝誦せられて 通州に到れるを

昔教紅袖佳人唱 昔紅袖の佳人をして唱へしめ

今遣青衫司馬愁 今青衫せいしんの司馬をして愁へしむ

十五年前、やつと及第し駆け出しの秘書省校書郎のころに長安の妓人阿軟に絶句を贈り、唱わせた事を回想しての七律の頷聯と頸聯である。十五年前長安で唱われた詩が遥か通州にまで伝えられ、そこでも愛誦され壁に書き付けられて今も残っているという。確かに壁の「緑水に紅蓮一朵開けば、千花百草も顔色無し」は、蓮を意中の人に寓し、千花百草を多くの美しい女性にたとえ、色彩も豊かで、数字を巧みに使った俗受けする名句である。蓮には同音の憐（恋人）の意味が含まれており、いとしいあなたが登場すれば、ほかの女性（千花百草）は物の数ではない、の意が込められている。これを貰った阿軟もさぞかし喜んだことであろう。そして貰った絶句を即興で高らかに歌い上げた。お気に入りの阿軟の美声を聴き、阿軟の送る秋波にうっとり悦んでいる未だ独身の白楽天の顔が浮かぶ。なお、「緑水」という琴の曲があり、『白氏文集』にも「聽彈古緑水0189」等と数例見える。阿軟に贈った詩句の「緑水」は琴の曲名を想起させる。「琴の緑水の曲が流れて、紅蓮のような阿軟が唱えば……」という含意のある詩句のように思う。氣を利かした楽人が阿軟の歌声に合わせて「緑水」の調べを演奏したという状況も想像される。或いは「緑水」が演奏されている時に白楽天が即興でこの詩を作り、阿軟に贈り、歌を所望したとも考えられる。この絶句を作った数年後にできた代表作「長恨歌」の「迴眸一笑百媚生、六宮粉黛無顔色」を想起させる詩句である。時と所をかえて、誰にでも贈れる詩句でもあり、華やかな花柳界でよく唱われたのであろう。お目当ての女性にこの詩句を贈れば、喜ばれるこ

とは必定である。それ故に都からはるかに離れた通州にも流伝し、当地でも持て囃された。微之も楽天も共に音律をよく解し、持ち前の詩才でこうした場でもよく作詩した。しかも、独身の若手有望官僚ということもあって花柳界で多いにもてたのであろう。今で言う、売れっ子作詞者の存在でもあったようだ。

当然のことかも知れないが、白の艶治や詩句は花柳界でもよく唱われた。というよりは、むしろ花柳界の好みに合わせて作詩（詞）したものもあつたであろう。花柳界には、酒、妓、音楽、それに合わせて唱われた詩やその他、男性を喜ばせるあらゆる悦楽が有つた。そうしたもののほとんどに対して白は敏感に反応した。

もの寂しい北窓の下、孤独な時にも詩、酒、琴を楽しみ、華やかな色街でも三友を大いに楽しんだ。白にとっては三友があれば、北窓の下でも花柳界でも楽しみは同じであつた。こうした環境に応じた適応性、柔軟性は彼の人生や官界での生き方にも通じるように思う。後年経済的にも豊かになつた彼が常に身边に妓を侍らせていたことも、音楽好きであるとともに、自らの詩がよく唱われたことも一因であろう。この他

舞看新翻曲 舞は見る 新翻の曲

歌聽自作詞 歌は聴く 自作の詞

「残酌晩飡66—3240」、開成元（八三六）年、六五歳、洛陽」

等と自作の詞が歌われるのを聴いている。恐らくこの詩は洛陽の宏壮な自邸で詠まれたものであろう。三千坪の大邸宅に池有り、亭有り、妓、音楽、舞有り、佳肴も酒も有りで、満ち足りた隠居生活を送っていた。白は樊素という歌舞が上手く、善く楊柳を唱う妓を家に住まわせており、その名声は洛陽に知れ渡っていた。彼女は無名の十代の少女時代から十年間、白に仕えたという（不能忘情吟3610）。十年の間にめきめきと上達し、洛下で名を得たのも、白の指導や理解有る庇護にもよるのではないか。樊素も心の底から音楽を愛する主人、良き知音を得て更に歌に磨きをかけたように思う。

ところで、一体妓を一人養うのにいくらかかったのだろう。彼女以外にも何人かの楽人や妓もいたであろうし、衣裳や楽器の購入等、人件費の安い当時とはいえ、二十世紀末の今の貨幣で年間数百万円は下らないだろう。白一族の何人かを扶養していたようだし、宏壮な邸宅

の購入、維持費もかさんだことだろう。このころになると貧しい青年時代とは全く次元の異なる世界に身を置くようになった。新樂府創作のころに批判した朱門の大廈高樓の住人に彼もいつしかなかった。

さすがに六十八歳の時に風病に倒れてからは家妓は手放しているが、その時の別れの詩「不能忘情吟3610」は人の心を打つ。白の優しさとともに如何に妓を愛し、歌舞音曲を愛したかがうかがわれる。

三

単に音楽が好きというのと曲を理解し、教えたり演奏ができるということにはかなりの差がある。音楽の描写の詳しさもさることながら、白楽天には人に教えることができるほど音楽の細部にまでに深い知識と理解があったようだ。

兩瓶箬下新開得 兩瓶の箬下 新に開き得たり
一曲霓霄初教成 一曲の霓霄 初めて教へ成る

〔湖上招客送春汎舟20—1402〕、長慶四（八二四）年、五三歳、杭州〕

時崔湖州寄新箬下酒来。樂妓按霓霄羽衣曲初畢。

時に崔湖州新たに箬下の酒を寄せ来たる。樂妓に霓霄羽衣曲を按じ初めて畢る。

「樂妓按霓霄羽衣曲」とあるが白楽天自ら手を取って教えたのであろう。音楽好きの彼は霓霄羽衣曲を愛し、何度も詩に詠んでいる。「江南逢天宝樂叟12—0582」という長い詩があるが、玄宗皇帝の御代を知る老翁との出会いが樂妓に霓霄羽衣曲を教える遠因となったのかも知れない。大唐帝国の皇帝とまではいかなくとも繁華な杭州の刺史といえはその地では国王のようにふるまえたのであろう。あるいは玄宗を気取るといふことも有ったのかも知れない。白は霓霄羽衣の曲をこよなく愛したが、それは代表作「長恨歌」の主人公玄宗、楊貴妃への憧憬、思い入れとも関係するように思える。玄宗もまた音楽を愛し、文学や学問に深い造詣のある皇帝であった。これについては霓霄羽衣曲とも合わせ、稿を改めて考えたい。

老去將何散老愁 老い去りて何を將てか 老愁を散ずる

新教小玉唱伊州 新に小玉に教へて 伊州を唱へしむ

〔伊州55—2584〕 太和二（八二八）年、五七歳、長安〔伊州は曲調の名〕

小園斑駁花初發 小園斑駁 花初めて発き

新樂錚錚教欲成 新樂錚錚として 教へ成らんと欲す

〔南園試小樂56—2650〕 太和三（八二九）年、五八歳、長安

管絃漸好新教得 管絃漸く好く 新たに教へ得たり

羅綺雖貧免外求 羅綺貧と雖も 外に求むることを免がる

〔嘗酒聽歌招客66—3277〕 開成元（八三六）年、六五歳、洛陽

「新教」と新曲を教えたことを繰り返して詩に詠んでいる。これも音楽好きであるがゆえに、新しい曲に対しての旺盛な好奇心の露れと考えられる。

白樂天の指図で音楽家が妓に楽曲や舞を教えたのではなく、白樂天自らが手を取って教えたのであろう。今でもそうだが、音楽を聴くことだけを樂しみにしている人と自らヴァイオリン等の樂器を演奏して樂しむ人と更には作詞、作曲や指揮までする人とは音楽に対する姿勢、造詣の深さに差があることは言うまでもあるまい。白が自ら作曲したという明証は認めにくいが売れっ子の作詞者ではあった。度々音楽を「教」えたとあるから、作曲もしたかも知れない。杭州刺史以降邸内に音楽家達を抱えるほどに経済的に豊かになっていた。それと共に音楽家たちに曲を教えたという詩が詠まれるようになっていった。邸内で好きなときに好きな音楽や舞を生で樂しむことができるというのは昔も今も最高の贅沢の一つであろう。

四

晩年洛陽に居を移してから更に音楽に関する詩を多く詠むようになる。晩年は詩と酒と音楽三昧の日々が多かったような印象を受ける。竹枝歌、浪陶沙、楊柳枝等の詞をよく詠み、色々と音楽の注記を施している。

「憶夢得56—2705」〔太和六（八三二）年、六一歳、洛陽〕の詩に『白香山詩集』では次の注がある。

夢得能唱竹枝、聞者愁絶。夢得能く竹枝を唱ひ、聞く者愁絶す。

劉白と呼ばれた晩年の友人劉禹錫は、詞の作者であるとともに美声の持ち主であった。詩人、官僚としての連帯感、同年の生まれに加えて、こうした歌好き、共通の音楽の趣味が二人をより親密にしたのだろう。他にも

夢得相過援琴命酒 夢得相過るに琴を援り酒を命ず

〔67—3381、開成三（八三八）年、六七歳、洛陽〕

という詩や

閑徵稚子窮經史 閑に稚子に徵して 經史を窮め

醉聽清吟勝管絃 酔ひて清吟を聴けば 管絃に勝る

〔「與夢得沽酒閑飲、且約後期67—3377」開成三（八三八）年、六七歳、洛陽〕

など劉白の交友には酒、音楽、詩が付き物であった。白もよく詩を吟じたり、歌を唱ったがその上手い、下手は不明である。想像するに、白の音楽好きから考えて下手ではなかっただろう。同じく「楊柳枝二十韻65—3190」〔太和八（八三四）年、六三歳、洛陽〕の注には楊柳枝、洛下新聲也。洛小妓有善歌之者。詞聲音韻、聽可動人。故賦之。

楊柳枝、洛下の新声なり。洛の小妓に善く之を歌ふ者有り。詞聲音韻、聴く人を動かす可し。故に之を賦す。

とある。この詩は二十韻からできており、その長さが白の思いの深さを示しているよう。洛陽の新しい歌声に感動してそれを長い詩に詠んで

いる。音律をよく解し、関心を持っていたが故に、妓の歌声にもまめに注をつけたのであろう。この他「問楊瓊51—2226」〔宝曆二（八二六）年、五五歳、蘇州〕では、

古人唱歌兼唱情 古人の唱歌は 兼ねて情を唱ふも

今人唱歌唯唱聲 今人の唱歌は 唯だ声を唱ふ

欲説向君君不會 説かんと欲して君に向かへども君会せず

試將此語問楊瓊 試みに此語を將て楊瓊に問ふ

昔の人は歌の心まで唱ったが、今の人は声だけで唱っていると批評する。歌は情で唱うものというのは今の声楽や歌謡曲にも通じる。ここでは一端の歌唱論を展開しており、音楽評論家の一面を覗かせている。「唱歌兼唱情」は音楽に対して深い理解、鑑識眼があつての発言である。玄人の歌声の良し悪しまでわかる鑑識力の持ち主であつた。此の詩に対して、元稹は「和樂天示楊瓊」（全唐詩卷四二二）と題する詩を詠んでいる。その詩に次のような自注を付けている。

楊瓊本名播、少爲江陵酒妓。去年姑蘇過瓊敘舊。及今見樂天此篇、因走筆追書此曲。

楊瓊本名は播、少くして江陵の酒妓と爲る。去年姑蘇に過ぎるに瓊旧を敘す。今樂天の此の篇を見るに及び、因て筆を走らせて此の曲を追書す。

元稹の自注から楊瓊という女性は江陵の酒妓であつたことがわかる。元稹の詩から彼女は若いころは「腰身瘦小」で「歌うこと円緊な好女」であつた。元稹の江陵左遷から十数年も経て姥桜になつた楊瓊を白も元も詩に詠んでいる。二人の妓や歌に対しての情熱の程も窺い知れよう。

「過裴令公宅」二絶句68—3489」〔会昌元（八四一）年、七十歳、洛陽〕の詩に、『白香山詩集』では注がある。

裴令公在日。常同聽楊柳枝歌。每偶雪天、無非招宴。二物如故。因成感情。

裴令公宅に過ぎる二絶句。裴令公在りし日。常に同に楊柳枝歌を聴く。雪天に偶ふ毎に、招宴非ざるは無し。二物故の如し。因りて感情を成す。

風吹楊柳出墻枝 風は吹く 楊柳の墻を出る枝
憶得同歡共醉時 憶ひ得たり 同に歡び共に酔ひし時

（略）

亡友の旧宅を通り過ぎた時、生前はその宅で常に楊柳枝と一緒に聴き、雪の日にはいつも共に飲酔したことを懐かしんでいる。今日の前には楊柳も雪も元のままにあるというのに、共に楽しんだ主は泉下の人になったことを歎く。七十五歳という長寿を得た白は、その分數々の友人に先立たれている。白詩の友人を悼む多くの詩は胸を打つが、この詩は亡き友への追憶が音楽と酒を伴って彼の脳裏を過った。

代琵琶弟子謝女師曹供奉新調弄譜「65—3175、太和八（八三四）年、六三歳、洛陽」

琵琶の弟子に代はりて女師曹供奉が新調の弄譜を寄せられしに謝す。

白は送られて来た新譜に上手く返礼できない弟子の代書をしている。この弟子は白の邸内で養われていたのであろうか。白の新曲に対する興味が偲ばれる。これらの詩に見られるように、音楽についての詳しい説明が多くなっている。これも音楽に対する関心興味の深さによるものであろう。

以上のように、白楽天の人生、文学において音楽は従来考えられて来た以上に重要な位置を占める。白の音楽の造詣の深さは、彼の育った環境とも関係があろう。残された資料からは、先ず母方の慈愛深い祖母の影響が考えられる。白は母方の祖母の墓誌銘「唐故坊州郿城尉尉陳府君夫人白氏墓誌銘24—1469」〔長慶一（八二二）年、五一歳、長安〕に於いて次のように叙している。

夫人撫訓幼女、爲節婦。及居易、行簡生、夫人鞠養成人、爲慈祖母。（中略）工刀尺、善琴書、皆出於餘力焉。

夫人幼女を撫訓し、節婦たり。居易、行簡の生まるるに及びて、夫人鞠養して人と成す、慈祖母たり。（中略）刀尺に工みに、琴書を善くす、皆余力より出でたり。

音楽の才能と幼児期の家庭環境が密接な関係があることは、バッハやモーツァルト等の例からも明らかである。白は祖母の「善琴書」の薫陶を幼い時から受けていた。そうした音楽的な環境が彼の音楽への感覚や天賦の才能に磨きをかけていたのであろう。琴を聴いたり、

演奏するのは人格を陶冶するという古来からの教えもあって、素直に琴の音に聴き入り、琴の練習に励む幼い白の姿が想像される（稿者も幼少時、歌の好きだった祖母から今は歌われもしない古い軍歌「水師營の会見」等を教えられ、今でも全部歌える。童謡もそうだが、幼いときに聴いた音楽は一生離れないものである）。

彼は若いころの病を繰り返して詩に詠んでいる。ひ弱な少年が病床で身近に親しめるものは音楽であった。動きの余り無いしんとした部屋で床に臥せりながら祖母の弾く琴の音にじつと聴き入ったり、自ら琴を弾いて心を慰めたのであろう。それに伴って音楽に対する理解や解釈も深まっていた。音楽は幼いときから常に彼の身辺にあり、それは終生変わることではなかった。祖母は白が二十九歳の時に他界しているが、琴の音を聴いてはやさしかった祖母を懐かしむこともあったのではないか。彼の母も「襄州別駕府君事状29—1497」〔元和六（八一）年、四一歳、長安〕に於いて、次のように叙せられている。

及別駕府君即世、諸子尚幼、未就師學、夫人親執詩書、晝夜教導、恂恂善誘、未嘗以一呵一杖加之。

別駕府君世に即くに及びて、諸子尚ほ幼く、未だ師に就きて学ばず。夫人親ら詩書を執り、昼夜教導し、恂恂として善く誘びく。未だ嘗て一呵一杖を以て之に加へず。

「親執詩書晝夜教導」とあるが母自ら詩を教える時には吟詠もし、その後には倣って子供たちも吟誦した。白が愛娘阿羅を詠んだ

學母畫眉様 母の画眉の様を学び

效吾詠詩聲 吾が詠詩の声に效ふ

〔吾雛08—0364〕長慶二（八二二）年、五十歳、長安

の中にも幼な子が親の口ずさむ詩を耳で聞いて覚え、それに倣って詩を詠むとある。我々日本人が百人一首を暗誦したように、詩を誦んずというのはリズムやメロディーを伴って誦詠しつつ暗記したのであろう。

こうした文章は多分に美化された面もあるが、事実に基づくものであろう。幼い時からの母や祖母からの音楽的な環境も彼の音楽に対する態度や人格形成に影響を与えていると思う。アーサー・ウェーリー氏は前掲書（第十一章）で

白の最も初期の詩には、音楽に対する言及はほとんどみられない。そしてそれは、彼の教育においては、特筆すべきものとしては現れ

ていない。

と述べられているが、いかがであろうか。

結び

『唐詩類苑』（内閣文庫本・汲古書院）巻六五、六六には「琴・箏・瑟・琵琶・笛」等を詠んだ詩が二百三十余首が収められている。その二巻の作者を多い順に並べるとやはり白楽天が一番多い。

- 一位 白楽天 四一首
- 二位 李白 一二首
- 三位 李賀 一一首
- 四位 李嶠 九首
- 五位 元稹 八首
- 六位 杜牧 七首

（「琵琶歌・白居易」とあるのは、元稹の誤りであり、差し替えた。韓愈は「琴操十首」のみが収められている）

白楽天は唐代では最大級の作品数を残しているので、『唐詩類苑』に取られた数が多いだけでは単純な比較はできにくいかもしれない。しかし、二位の李白の約三倍半というのはやはり、飛び抜けて多く、ある程度の傾向は示している。元稹が五位というのも彼も音楽に対して並々ならぬ関心を持っていた証左といえよう。因に、劉禹錫は四首で九位、杜甫は三首である。

音楽は彼の人生や作品を豊かなものにした。彼以前の詩人でこれほど音楽を詠った詩人はあるまい。彼の詩は都の花柳界を始め多くの階層、地域の人々によって唱われた。彼の美しい詩句によるところが大ではあるが、彼が音楽に精通しており、詩に内在するリズムも唱いやすい理由の一つであっただろう。太田氏も指摘されたように、此の方面での研究も未開拓である。官界に入ってから花柳界にもよく出入

りしたようだし、そこでの妓女たちとの交歓の中で詩や音楽性も磨かれ、酒の味も覚え、粹な面が養われたのではないか。彼ほど妓を詠んだ詩人も稀であろう。彼の代表作「琵琶行」も淪落した妓が主人公であったし、内容は音楽詩とでもよぶものであった。「長恨歌」にも妙な音楽は登場する。

白楽天は三友を始め、雪月花、茶、鶴、竹、蓮等身の回りのあらゆるものに愛情の注げる人であった。その愛情は彼の代表作「新樂府」等では貧困にあえぐ人々にも向けられた。自ら認めるように多情の人であった（0630等）。それ故に、残した作品は数量的にも多いが、実に多方面に及び、幅の広い、豊かな世界を構築している。それに伴って明るい自己肯定的な世界が認められる。彼の作品全体の底に流れる暖かい人間性とも無縁ではあるまい（拙稿「白楽天の博愛」大手前女子大学論集三十二号、九九年二月）。

六十代になって多くの知己肉親にも先立たれ、彼も病勝ちであったこともあって静かな穏やか生活を求めたのであろう。食うに困らぬ生活のたづきはあった。彼は繰り返し、知足を詠う。長安での激しさを増した党争や俗利に煩わされることを避けた。それよりは洛陽で半分隠居生活を送りながら三友を始めとした満ち足りた芸術、趣味に浸れる生活を望んだ。そこは彼が心底安住できる場所であり、そこに没入できる芸術家肌の詩人官僚であった。こうした芸術的世界に充足できなかつたり、その境地が理解できない俗人たちは長安で名利、権勢を巡って日夜齟齬と奔走した。元稹も晩年はそのような生き方であったようだ。多趣味で時には酒などの快樂にのめり込む面も有ったが、晩年は閑適を満喫して七十五歳の天寿をまっとうした幸せな詩人であったと思う。

以上音楽を中心に考察を加えたが、彼の愛した楽器、好みの曲名等について次稿で検討する予定である。